

精神障害者から見た人々

Vol.8

広田和子

精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

テレビ局記者 戸来久雄さん(34歳)

94(平6)年、当時の主治医だったA医師に日本精神神経学会の話をしたところ、A医師は「私は病院地域精神医学会のほうが好き」と言った。そのことを私が神奈川県立精神保健福祉センターの人に話すと「その学会の会報がここにあるわよ」と教えてくれた。

こうして私は日本病院地域精神医学会(略称、病地学会)の機関誌に出会い、名古屋で開かれる病地学会で演題を募集していることと、当事者の集いがあることを知り、演題に応募した。するとNHKテレビのB記者が電話をくれて、「当事者がこんなに医学会へ出るのは初めてのことなので、発表当日夕方の東海地方のニュースに出てほしい」と依頼された。「名古屋の仲間たちががんばったんだから、名古屋の人に出てもらったほうがいい」と私は断った。

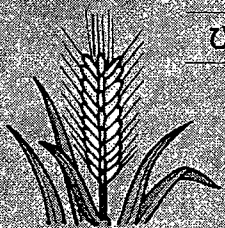
翌日、Bさんから「…名古屋の〇〇さんをお願いしたところ、『マスコミにたたかれたことがあるので』と断られて…」と電話が入り、私は「大阪の人たちにも声をかけて」と言った。2、3日後、Bさんから「出てほしい人にはみんな断られました。私としては最初から広田さんに出てほしかったので、どうしても出てほしい」と言われ、私は出演を了解した。ところがその後、Bさんより「広田さんに出ただけに当たり、親兄弟親戚一同の了解を取って…」という電話が入り、「何のために？」と私が聞くと「上司に言われました」という答えに「Bさん！あなたを信頼しているから出るのよ。私の意志で」と強く言うと、Bさんは「そうですよね。おかしいですよね」と言った。こうして私は「誰もが安心して利用できる精神医療」を発表してニュース番組の収録をした。このときの話はおかしいと思っただけで、「本人が出たあと、家族のクレームがつくことが多いので、NHKの人が慎重になっ

んだと思う」と他のマスコミの人から教えてもらった。この逆の場合、どうなのだろうか？ 01(平13)年に入るとNHKの戸来君から電話をもらい、「うちに来て…」というところから始まり、5月14日に東京第二弁護士会と全家連の共催による「精神障害者の責任能力」というシンポジウムに私が出たとき、戸来君も会場に来てくれた。

シンポで私は「弁護士が精神鑑定を法廷戦術に使うので検察官が不起訴にしたがる。精神障害者の犯罪率は低く、起訴率も低い…」というような趣旨の発言をした。終了後、会場にいた法務省の人が飛んできて、「広田さん！…精神障害者の犯罪はどのぐらいあるかわからないのですよ！」と言った。私は「犯罪白書に数字が出てるじゃない！」と言った。「そうなんです。広田さん！これからもどうぞよろしく…」と名刺を渡された。この時点で法務省と厚労省の合同検討会が開催されていた。

そして6月8日、運命の池田小事件が起きた。やがて私は社会保障審議会の委員に内定し、12月19日に初めての委員会が開催される時戸来君がきて「広田さん！カメラマンと一緒に来ました。番組で使われるかわかりませんが、収録したのでコメントを…」と言われた。その夜、戸来君から電話で首都圏ニュースに出たことを知り、親しいタクシの運転手さんにも「…ラジオのトップニュースで…」と言われた。今も戸来記者は医療や福祉など、精神障害者に関する諸問題に強い関心を持ってくれている。

ひろたかすこ



かつて私は主治医に「文章を書くのが好き」と語っていたところ、それが病状としてとらえられていた時代もあった。インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。現在も毎日11錠の向精神薬をのまないで眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。